三島市　（通巻　133号）

郷土資料館だより

Vol.45 No. 2
2022.11.15

企画展「古代の伊豆国—国府と国分寺—」開催中

●会　　期　令和４年10月15日(土)～令和５年１月29日(日)
※12/27～1/2は休館、1/3は企画展示室のみ開館

●会　　場　郷土資料館　１階企画展示室

古代の日本は、緊迫する東アジア情勢の中、中国から律令制度を導入し、官僚機構の整備、身分制の再編、戸籍や租税の制度的確立をすすめ、地方でもそれを実行に移すために行政組織を整備していきました。

現在の静岡県域には、遠江・駿河・伊豆の３つの国が置かれました。三島市域は伊豆国に含まれ、その統治拠点となる「国府」の所在地に定められて、中枢となる庁舎「国庁」が造営されました。そこでは都から地方行政を担うために派遣された「国司」らが政務をとり、その周辺には国司館や正倉、国厨や工房など、様々な役所関連施設が整備されていきました。天平13年（741）には聖武天皇の国分寺建立の詔をうけ、三島市域に国分寺・国分尼寺も設置されることとなりました。

本企画展では、古代伊豆国の政治・経済・文化の中心地であった三島の様子について、国府・国分寺に関連する遺跡の出土資料を中心にご紹介します。

●国司館と踊る目代

上才塚遺跡第2地点　調査区全景

〈伊豆国の国司館推定地〉

国司とは、地方統治を担うために朝廷から任命された官人で、６年(のち４年)の任期付きで地方に赴任しました。彼らが任期中に滞在していた官舎が「国司館」です。国司らは、時代が降ると国庁で執るべき政務を国司館で執るようになっていったといわれており、国司館は単なる社宅ではなく、公的な性格をあわせもつ建物でした。

伊豆国におかれた国司館は、旧下田街道の東側、東本町の上才塚遺跡の辺りにあったのだろうと考えられています。現在は住宅地となっていて当時の痕跡は見あたりませんが、1990～1991年に発掘調査が行われ、板塀で囲まれた建物跡とみられる柱穴（板塀跡：黄色実線、建物跡：青色実線）や、8～9世紀の土器・瓦、10世紀のものとおもわれる腰帯（ベルト）の飾りなどが見つかりました。調査区から南東に向かって建物群が広がっていると考えられ、上才塚遺跡は国司館の北西隅の一画であろうと考えられています。

〈国司館で踊る目代〉

時代は降りますが、平安時代末期成立の説話集『今昔物語集』巻28には、「伊豆守小野五友目代語」というタイトルで、伊豆国の国司館を舞台とする説話が収められています。伊豆国に着任した国守（国司の長官）小野五友（五倫）という人物と、五友に雇われた目代（国司を補佐し、不在の際は代わりに国務を執る私設の事務官）を中心とするお話です。

伊豆国の国守として着任した小野五友は、目代をつとめられる事務能力のある人材を探していまし

た。お隣の駿河国に優秀な男がいると聞いたため、呼び寄せてみたところ、それは60歳くらいの恰幅（かっぷく）の良い、しかめっ面をした人物でした。目代として採用するなら、むしろそうした顔立ちの方が頼もしげで都合がよかったので、字を書かせてみたところ、さして綺麗ではないものの、目代として使うには十分でした。次に事務能力を確かめるため、税に関わる書類を取り出して計算させてみると、すぐに答えが返ってきます。これは適任だと喜んで、早速採用することになりました。その後は目代として万事を任せ、身の回りにおいて重用しました。それから２年ほどが経過しても、五友の気に障るようなふるまいは一切なく、ミスなく、手早く、事務をこなし、あつく信用されて、その評判は隣国まで届くほどでした。

そんなある日のことです。五友は国司館で目代の男とともに政務を執っていました。男には、作成した文書に国庁の印を押す仕事を任せていました。そんな中、突如、館内に傀儡子（くぐつ）（歌舞音曲にあわせて人形を操る遊芸民）の一行が乱入してきました。傀儡子たちは、五友と男の前に並んで歌をうたい、笛をふき、おもしろげに囃（はや）し立てだしました。五友もつられて心が浮き立ち、おもしろく思って見ていたところ、ふと目代の男の異変に気づきます。それまで男は神妙な表情で文書の押印作業をこなしていたのですが、どうもその印をつく動作が、傀儡子の音楽にあわせて３拍子のリズムをとっているようなのです。不思議に思って見続けていると、今度は男の肩が３拍子のリズムをきざみ出しました。傀儡子たちもその様子に気づいたようで、ますますもりあがって曲のテンポを速めます。するととうとう男は声を張り上げ、傀儡子と一緒に歌い出してしまいました。

五友はびっくりしました。あっけにとられて見ていると、男は印を押しながら、「昔のことが忘れられずに…」と言うや、にわかに立ち上がって走り出て、傀儡子といっしょに踊り始めました。傀儡子たちも一層もりあがって歌い囃します。館で働く同僚たちがなんだどうしたと笑いだしました。笑われだしたことに気づいた男は、自らの身を恥じ、印を放り投げて逃げ出してしまいました。

五友が改めて傀儡子たちに事情を尋ねると、どうやら目代の男は、もとは彼らと同じ傀儡子だったそうです。傀儡子たちは、男が字を書き、書物を読んで出世して、この国の目代にまでなっているという話を耳に入れ、しかしそれでも昔の心を忘れられずにいるのではないかと思い、それを確めたくて国司館へ乱入したというのです。その後、館の人たちは彼を「傀儡子目代」と呼んで笑いあい、その評判は以前より少し落ちてしまいましたが、五友は男を哀れに思ってこれまでどおり使い続けたということです。人々は、傀儡神（くぐつがみ）というものがいて、それが男の心を狂わせたのだろうと言い合い、この話を語り伝えたといいます。

さて、この説話は、当時の読み手に違和感なく受け容れられるほど、国司館で国務を執ることが常態化していたこと、またその政務処理の様子や、国守が目代に求めた事務能力などを教えてくれる資料として知られています。あくまで説話ですので、このような目代が実在したのかどうかはわかりませんが、伊豆国の国府の様子をより具体的にイメージできるエピソードといえるでしょう。

企画展「三島ゆかりの文化人たち（仮）」開催

●開催期間　令和５年２月11日（土祝）～５月28日（日）
●会　　場　郷土資料館１階企画展示室

戦乱の世が終わり安定的な世の中になった江戸時代には、経済が発展し、一般庶民にもさまざまな文化的活動が普及しました。三島周辺でも、俳句や和歌、漢詩などを嗜む人々が多数存在しました。今回の企画展は、江戸時代から戦後にかけて地域で活躍した文化人たちを紹介し、彼らの作品をご覧いただくものです。

写真：贄川他石（邦作／政治家／実業家／俳人）

向山古墳群 第16号墳　第１回

――古墳の立地と調査概要――

遺伝研坂下の交差点を向山小学校に向けて南下すると、箱根山西麓の尾根上に「こんもり」としたお饅頭の形をした山、向山16号墳があります。向山小学校の校門前にあって、これを端緒に東大場の住宅団地に向けて直線的に連続して並ぶ現存14基の「古墳群」を形成しています。

古墳群は古墳時代前期（３世紀末）～古墳時代後期（６世紀前半）のもので、主体部（埋葬部）はすべて竪穴系墓壙で構成され、追葬の可能な横穴式石室墳は含まれていませんでした。また、きわめて古い群集墳という意味で「初期群集墳」とも呼称されてきました。そのうち前方後円墳は、南西端の標高が低く平野や古道から「しっかり」と見える位置に造営された16号墳と、北東端の標高が高く「ひっそり」と形成された３号墳の２基だけです。「始まりと終わりに」ということで、何らかの意味を有する配置ではないかと考えられています。

さて、16号墳の調査は合計24地点と多く複数年にわたりますので大別して箇条書きします。

昭和63年～　遺跡範囲に**[登録]**も、古墳であろうかという段階で、道路拡幅工事後の斜面に版築状の層序を確認（Ｈ８）。

平成10・15年　遺跡**[有無]**の確認調査を実施。

平成16年　土地所有者の掘削により古墳**[発見]**。竪穴式石槨、墳丘**[規模]**の確認。

平成17年　樹木伐採と**[測量]**調査の実施。

平成18・26年　墳丘規模確認の**[追加]**調査。

平成27年　調査報告書を**[刊行]**。国に具申。

平成28年　文化庁の指示により古墳群全体を国指定史跡とするため、調査専門委員会を設置。５年程度で**[再調査]**を完了する計画を策定。

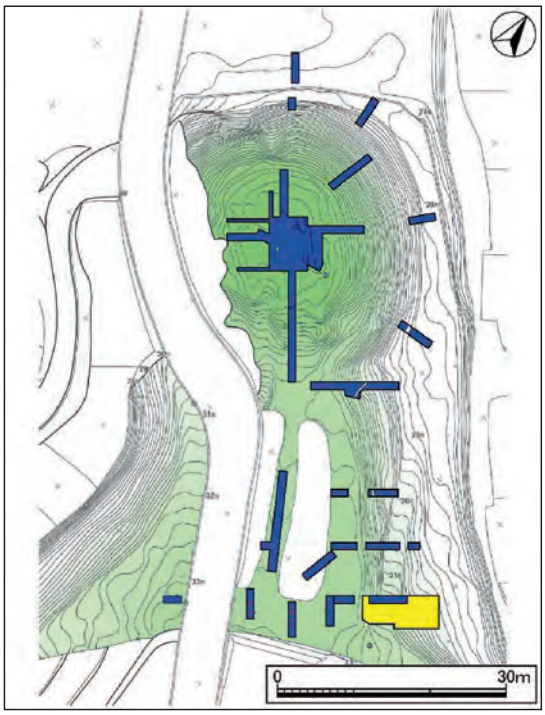
令和４年　コロナ禍のため調査及び委員会が大幅に**[延期]**。現在に至る。

古墳群は現在、県指定の段階ですが、その規模と主体部の状況から国指定史跡となってもよいと判断されています。文化庁公認の専門家による再調査を実施し、ゆるやかに国指定を目指す方向性が示唆されています。その間には、市民への周知と古墳群に対する保護意識の醸成が期待されているため、目標となる**[保存と活用]**の気運が徐々に高まることを目指したいと考えております。

16号古墳は現時点でも、静岡県の歴史を塗り替える要素にあふれていますので、今後も予測を含め、お知らせできることを順次発表します。

次回、向山古墳群 第16号墳 第２回は「墓壙の竪穴式石槨」について記述します。

古墳群の位置図（赤）（1/30,000）



16号墳の調査範囲と地形測量図（1/1,000）

三島の歴史とジオポイント・25

――愛染院（あいぜんいん）跡の溶岩塚――

三島駅から三嶋大社へ向かう大通りを進むと、正面に欅（けやき）・椋木（むくのき）・榎（えのき）などの大木が目立つ小さな森が目に入ります。木々は、３本の自動車道に周囲を削られた長径約10ｍ、高さ４ｍ弱の溶岩塚の残骸に、しがみつく様に生えています。

この溶岩塚は、約１万年前に富士山から流下した、三島溶岩流上部層の末端部が上流側の溶岩に押され盛り上ったものです。

市民文化会館から見た愛染院跡溶岩塚

江戸時代には、市民文化会館周辺から楽寿園東口付近にかけて、三嶋大社の仏教部門を統括する「愛染院」と呼ばれる寺院があり、溶岩塚はその庭山でした。

愛染院は1854年の安政東海地震で倒壊し、再建されること無く、明治元（1868）年の神仏分離令で消滅しました。

愛染院跡には、明治34（1901）年に田方郡立三島高等女学校が設置されました。大正５（1916）年の地形図や当時の記念写真で確認すると、溶岩塚は並行して並ぶ校舎の北から２棟目の東側にあり、正門のすぐ内側に位置していたことがわかります。

大正5年の地形図の三島高等女学校

女学校は大正13（1924）年に現在の順天堂大学の位置に移転しました。

昭和９（1934）年には三島駅が開業し、自動車の増加に伴い、溶岩塚の周りには自動車道が次々に整備され、その都度、溶岩塚は削られました。交通関係者からは完全撤去の要望もありましたが、地元住民の働きかけで消滅を免れ、昭和41年には市指定天然記念物「愛染院跡溶岩塚」として永久保存が確定しました。

しかし、昭和59（1984）年には、不可解なことに溶岩塚の上に人工の滝が作られました。

「桃夭園」の碑

溶岩塚は四周を削除されていますが、丁寧に観察すると、盛り上がったときの溶岩の割れ目、冷却時の収縮で生じた割れ目（節理）、溶岩の流れた方向などが確認できます。

溶岩塚の南側には、女学校記念碑「桃夭園」（若い子女が集う学園、明治44年・安山岩製）があります。

北側には「三島竹枝」（菰池畔に居を構えた杉田六江、雅号・呑山の漢詩集の表題、昭和17年・伊豆の国市北江間の安山岩製）の石碑が目立ちます。

西側には「愛染院跡」（伊豆の国市・城山付近産、デイサイト質の柱状節理片）や、「愛染の滝」（黒御影石製）などの石碑があります。

溶岩塚本来の姿は白滝公園内の市天然記念物「小型溶岩塚」で確認できます。

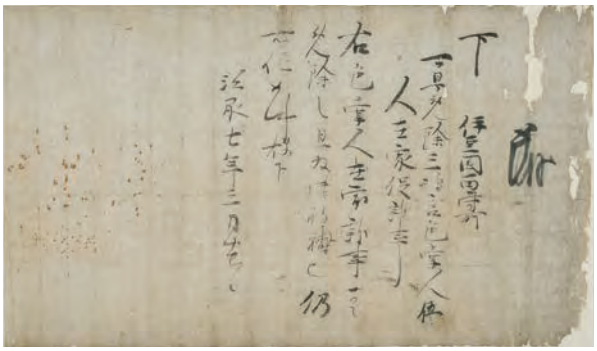
なお、三島高女の後身である三島北高の校庭「紫苑の森」は現存する数少ない溶岩塚の一つです。愛染院跡溶岩塚と共に、大切に保護していただきたいです。

（郷土資料館運営協議会委員・増島淳）

三嶋大社の古文書をよむ　第16回

◆源頼朝の古文書～色掌人とは～

今回は治承７年（1183、寿永２）３月17日付「源頼朝下文」です。源頼朝の古文書については、頼朝が生きている間にも偽文書が作られたといわれ、研究史料としては注意が必要と考えられてきました。大正から昭和始めにかけ編纂された『静岡県史料』でも、三嶋大社所蔵の３通の頼朝文書については、「当時のものにあらず」と注記しています。1988年、頼朝文書を集成した画期的史料集、黒川高明氏編著『源頼朝文書の研究』史料編（吉川弘文館）でも、やはり疑問のある文書とされています。その理解は直後に発刊された『静岡県史』資料編５中世１（1989年）でも同じです。



▲源頼朝下文　▼書き下し

下す。伊豆国の留守所。
早く三嶋宮色掌人伍人の在家役雑事を免除すべし。
右、色掌人在家雑事、免除せしむべし。且は御祈祷を為すなり。仍って仰せの所、件の如し。故に下す。
治承七年三月十七日
（源頼朝）（花押）

しかしその後、林譲氏によって、この文書がほぼ正文とみなせるとの見解が示されると（「源頼朝の花押について」『東京大学史料編纂所研究紀要』６、1996年）、これまで疑問とされていた頼朝文書に対する見方も変わりつつあります。実際、1997年に刊行された『静岡県史』の通史編２中世では、この文書を真正なものとして検討しています（永村眞氏執筆分）。ただしこれまでのところ、文書の内容にまで詳しく踏み込んだ解説は見ないので、内容に立ち入って紹介しておきましょう。

まず冒頭に「留守所」に下す＝指示・命令する、とあります。伊豆国の国司らが執務する役所に宛てた指示書です。当時の国の役所は、国守（国司の長官）が赴任せず目代が代理で執務を取ることが多く、留守所と呼ばれました。指示の内容に、「在家役雑事」の免除とあります。在家は住居のほか田畑などの土地などを含めた課税単位で、在家役は在家に賦課される税の意。雑事は一般的な年貢以外の租税や労役。では誰の在家役雑事を免除するのかですが、「色掌人」とあります。「色」は当て字で、当時の用語では「職掌人」のことと考えられます。では職掌人とは？

『静岡県史』通史編では、職掌人を様々な諸役を勤める奉仕者の語と解しているようです。『現代語訳 吾妻鏡』（吉川弘文館刊）でも、「寺社で諸役を務めた者」（第３巻164頁など）、「雑務を勤めた俗形の者」（第７巻250頁）などの注記をしているので、同様のようです。確かに職掌の用語を、諸役や雑務を担当する職員という意味で使う史料も見かけますが、この文書の場合、もう少し限定的に解したいと考えています。

例えば、江戸時代後期の地誌『新編相模国風土記稿』に、鶴岡八幡宮に職掌という神楽奉仕者がいたことが書かれています。現在の鎌倉地域にも職掌の流れを汲むという神楽奉仕者＝神楽男が残る例があります。鶴岡八幡宮の祖宮である石清水八幡宮でも神楽にかかわる職掌人の語がみられます（『宮寺縁事抄仏神事次第 御神楽次第本』のなかに「八幡職掌人等行御神楽次第」の語がある）。こうした例から、三嶋大社文書の職掌も神楽奉仕者＝神楽男としての意味をもつと考えます。

神楽というと、地域の祭事で催される素朴な民俗芸能を思い浮かべる方が多いと思いますが、当時の神楽は重要な神前・祈祷儀礼です。『吾妻鏡』でも、しばしば大切な神事や祈祷にて神楽が奏される例が記されます。また巫女・職掌と併記される箇所もあります。職掌の謡いや演奏のもと、巫女による舞が納められましたから、神楽奉仕者として彼らが併記されるのは自然です。

三嶋大社の「田祭・お田打ち神事」（静岡県指定無形民俗文化財）では、後半の鳥追いの所作で「これはたんが鳥追い（これは誰のための鳥追いか）、○○の（が）鳥追い（○○のための鳥追い）」という掛け合いが続きますが、かつてはこの謡いのなかに「みこ・しきしょうが鳥追い」の文言がありました。やはり巫女と職掌がひとまとまりとなっているのは、共に神楽奉仕者であるためでしょう。

税を免除するとは随分な厚遇であり、相応の理由があるはずです。ですから鎌倉殿や幕府にとって重要な祈祷、祭事を行うことへの対価として行った施策と考えるべきでしょう。文言にもはっきり「祈祷をせよ」と記しています。つまりこの文書は、神楽奉仕を行う職掌人にかかる税（伊豆国の役所が賦課する在家役雑事）を免除するというもので、大切な神楽祈祷を、安定的に行わせるための優遇策として示したものと解釈できます。当時の三嶋社祭祀の様子を伝える史料はほとんど残っていないなか、祭祀と奉仕者の一端が具体的に表れた貴重な文書なのです。

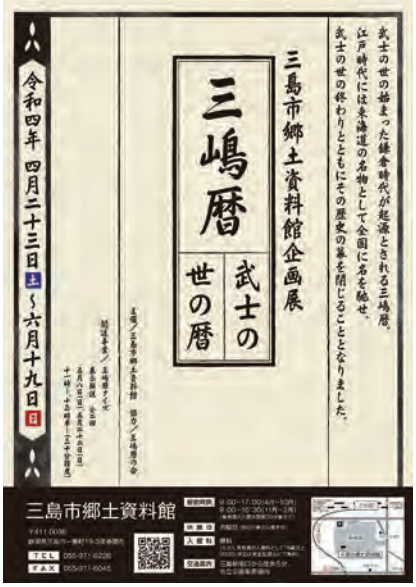
（三島市郷土資料館運営協議会委員・奥村徹也／三嶋大社宝物館 学芸員）

企画展「三嶋暦　武士の世の暦」報告

●開催期間　令和４年４月23日(土)～６月19日(日)
●展示資料数　76点　　**●入場者数**　9,779人
●関連事業　展示解説　５月８日(日)・22日(日)／11時～・13時半～　参加者数：計24名
三嶋暦の会による展示ガイド　実施日数：計７日　協力会員数：延べ10名

本企画展は、中世以来の歴史をもつ三嶋暦についてより深く知っていただくために開催したもので、三嶋暦（こよみし）師河合家伝来の資料を中心に展示しました。開催にあたっては三嶋暦の会の協力のもと、会期中の週末に同会会員１～２名が会場内に待機し、来館者の質問に答える形をとりました。なお、郷土資料館では令和３年度に河合家の所蔵資料調査（平成３・４年度の県教育委員会による調査リストをもとに原品の有無を確認）を実施しており、本展示にはその際の調査資料を積極的に用いるよう努めました。

アンケート調査では、「とてもおもしろかった」「ただ並べられてもわからなかったので、説明がくわしくて良かった」等といった好意的な意見をいただき、また「版木からどうやって印刷したのか、印刷技術に関する情報も欲しかった」という声もありました。



博物館実習

●開催期間　令和4年8月30日(火)～9月9日(金)のうち７日間
●参加人数　３名

本年度も学芸員資格の取得を希望される学生に対して「博物館実習」の受け入れを実施しました。実習は８日間の日程で実施する予定でしたが、うち１日は新型コロナ感染症の感染状況の悪化をうけ中止としました。その日は郷土教室の補助を予定しており、不特定多数の人との接触が想定されたためです。館運営について解説し、資料の取り扱いのレクチャー、収蔵庫整理、民具資料の台帳作成や石造物調査等の実習を行いました。また、館外実習として西小学校にて郷土資料室の展示のメンテナンスや校内に所在する美術資料の調査にも入ってもらいました。右の写真はその時の調査風景を撮ったものです。

●実習内容

１日目	オリエンテーション 館事業・教育普及について	５日目	収蔵庫整理 常設展メンテナンス
２日目	西小郷土資料室整備、美術資料調査	６日目	他館見学（佐野美術館・三嶋大社宝物館）
３日目	資料撮影レクチャー、民具の台帳作成	７日目	資料の取り扱いレクチャー、石造物調査
４日目	郷土教室補助（中止）	８日目	資料撮影、台帳作成、意見交換・講評

郷土教室・体験イベントの報告と予定

郷土資料館では、楽しみながら学べる体験イベントをボランティアさんと一緒に開催しています。令和４年７月から９月までに行った事業をご紹介します。

日　程	郷土教室	内　容	参加者
７月９日（土）	江戸時代の三島宿	三島の歴史クイズ、三島宿の展示解説	28人
８月６日（土）	機織り体験	裂き織りの体験　講師：ギャラリーあさひ　杉山洋子氏	10人
８月６日（土）	昔のあそび	ブンブンごまと、牛乳パックで作る竹トンボ	47人
９月３日（土）	紙漉き体験	和紙を漉いてハガキを作りくずし字スタンプでかざる 協力：三島ゆうすい会	47人

機織り体験の様子

紙漉き体験の様子

これからの郷土教室の予定

いずれも参加費無料！小さなお子さまからお年寄りまでお気軽にご参加いただけます。
楽しく遊んで、郷土の歴史や文化を体験してみよう！

日　程	郷土教室	内　容
12月３日（土）	ワラ細工	ワラでお正月かざりを作ってみよう！
１月14日（土）	リリアン編み	干支のウサギの編みぐるみを作ろう！ 要申込（12月11日まで受付、定員8組・1組3名まで、小3以下保護者同伴、応募多数時は抽選）
２月４日（土）	楽寿園の自然	富士山の溶岩観察ほか
３月４日（土）	江戸時代の三島宿	昔のペーパークラフト「立版古（たてばんこ）」を作ろう！ 三島宿を中心とした展示ガイドも聞けるよ。

ワラ細工

リリアン編み

江戸時代の三島宿（立版古）

寄贈資料の紹介

令和４年５月から同年９月までに、次の方々から貴重な資料をご寄贈いただきました。お礼申し上げます。

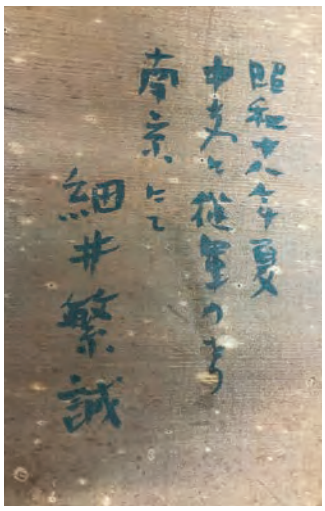
●寄贈資料

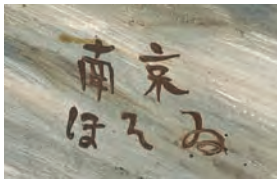
寄贈者	資料名	点数
錦田中学校	尋常小学校教科書、東中・坂中校歌関係資料	３点
個　人	『北伊豆震災一周年記念写真帖』	１点
高梨美恵子氏	和書（『日本歳時記』４冊、『ききんのこころえ』、『節要誌』）、古文書（「御定書写」「口達書」）	８点
鈴木健二氏	『女訓孝経』、謡本（「春日龍神」「船橋」「江口」「花筐」「源氏供養」収録）、駿河銀行佐野支店当座預金通帳	３点
青木梅次郎氏	細井繁誠油絵（昭和18年南京にて描かれた作品。タイトル不詳）	１点
市畑晶子氏	藤秀館製糸場関係資料（創業家関係資料含）	一括

●細井繁誠作　油絵（題不詳）

細井繁誠は明治38年（1905）に田方郡錦田村（現三島市）三ツ谷新田に生まれました。昭和元年（1926）に「路地」が帝展（帝国美術院展覧会。戦後日本美術展覧会、通称「日展」となり、現在に至る）に入選、浜松で創作活動を行いました。その後三島に戻り、戦後は地元文化人らと「十日会」を結成するなど、市民文化運動にも尽力した画家です。平成７年（1995）には、「月と芋」が、三島市の指定文化財となりました。

今回寄贈された作品は、旧蔵者青木梅次郎氏が終生大切にしていたもので、ご遺族により寄贈されました。板に描かれ、画面内に「南京　ほそゐ」裏面には「昭和十八年夏　中支に従軍のをり　南京にて　細井繁誠」と書かれており、描かれているのはおそらく南京の町角だと考えられます。





作品全体（写真左）と、裏面に書かれた墨書（写真中央）、表面のサイン（写真右）

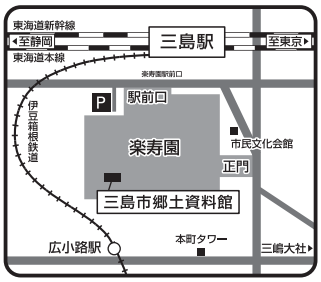
郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228　FAX 055-971-6045

開館時間　午前９時～午後５時（４月～10月）
午前９時～午後４時30分（11月～３月）

休館日　毎週月曜日（祝日のときは翌平日）、年末年始

入館料　無料（ただし楽寿園入園料として別途300円かかります。15歳未満は無料、学生は学生証提示にて無料。）



三島駅（南口）から徒歩５分。

郷土資料館だより

Vol.45　No.2（第133号）
発行日　令和4年11月15日（年3回発行）
編　集　三島市郷土資料館
発　行　三島市教育委員会
E-mail：kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp
URL：https://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/